

唐以前の福建及び臺灣に就いて

市村瓊次郎

私の演題は「唐以前の福建及び臺灣に就いて」と云ふのである、けれども唐以前には實は福建臺灣と云ふ名稱はない。唐の高祖の武徳四年(西曆六一四年)に建州を置き、玄宗の開元十三年(七二五)に福州を置き、徳宗の興元元年(七八四)に浙江東西福建嶺南等道の宣慰安撫使を置かれたが、是が歴史に福建と云ふ名稱の現はれた初であらう。其後宋の太宗の至道三年(九九七年)に福建路を置き、元の世祖の至元十五年(一二七八年)に福建行省を置いた。これが福建省の名稱の起原であるが、唐以前に於ては福建の名稱はなかつたのである。又臺灣の名稱は明末から現はれたので、周嬰の遠遊編に東番記を引いて稱臺灣爲台員とある由なれば、初は臺員の文字を以て記され、後に臺灣の文字に改まつたのである。故に正確に申せば唐以前の福建臺灣と云ふ演題は名實相かなはぬやうに思ふけれども私の演題の趣意は今日の福建及び臺灣が唐以前に如何なる有様であつたかを述べんとするのであるから、暫く此の名稱を借りて演題にしたのに過ぎない。

唐以後の福建は殆廣東と同一の地位に進み、その内地の發達は勿論、沿岸地方には亞刺比亞人が來つて通商を試みたこともある。その後、歐人の東漸するに及び、廣東と福建とは

特に重要な地方になつた。又唐以後の臺灣は宋の時に澎湖の東の卑舍那國として知られたのが即ちこれだといふ説がある。

元代には澎湖に巡檢司を置いたともあるが、臺灣は流求といふ名稱で知られた。明末には臺灣として現はれ、歐人の東漸の時に及び、漸く重要な地位になり、廣東の瓊州島よりは一層深い關係を有するやうになつたのである。此の廣東と瓊州島とが極めて古い時代からして割合に早く開けて廣く知られたに拘らず、福建と臺灣とは割合に後に開かれ、晚く知られたのはどう云ふ譯であらうか、これについて從來少しく研究した所を述べて、諸彦の指教を受けたいと思ふ。

廣東方面の地方は、秦が南越を平定した時に南海桂林象郡の三郡を置いて郡縣の制度を布いたことは、普通既知の事實である。秦の亡びた後に南越はまた獨立することになつたが、漢の武帝の時に之を征畧して九郡を置いた。その九郡は今の廣東は勿論、廣西安南の方面にまで及び、瓊州島には儋耳珠崖の二郡を置いたのである。漢書二十八卷地理志に據れば、秦南海尉趙佗亦自王傳國。至武帝時盡滅以爲郡。云處近海，多犀象毒瑇瑁珠璣銀銅果布之溲，中國往商賈者多取富焉。番禺其一都會也。自合浦徐聞南入海得大州。東南西北方千里。武帝元封元年略以爲儋耳珠崖郡。民皆服布如單被。穿中央爲貫頭。男子耕農種禾稻紵麻。女子桑蠶織績。亡馬與虎。民有五畜。山多麋鬻。兵則矛盾刀木弓弩竹矢。或骨爲鏃。自初爲郡縣。吏卒中國人多侵陵之。故率數歲幾一反。元帝時遂罷棄之。

とある。これをみれば當時の番禺今の廣州府は已に南方の都會として頗る開けて居つたことが分り、又合浦徐聞と云ふ所から南方へ航海すると大きな島に行きあたる。その島を儋耳、珠崖の二郡にしたといふのであるから、これが瓊州島であることは明である。而してその島の土民の風俗或は物産、其の他について委しい説明をしてゐる所を見ると、廣東の地方は勿論瓊州島の地方までも漢に知られてゐたことが分る。のみならず、此の海路から段段南方へ進んで行くと色々の國があり、これと交通した事なども記載されてゐる。かやうに漢の時代に今の廣東方面、特に瓊州島などが割合によく知られてゐるに當つて福建と臺灣とは當時どう云う状態であつたのであらう。

今の福建省は舊來の説に據ると秦の閩中郡、漢の閩越の地方に當てゝ居る。此地方には今でも閩江もあれば閩縣も置かれて居るが、古くから閩と云ふ名稱を加へられ、閩省といへば福建省、閩書といへば福建省の地志、浙閩總督といへば浙江と福建との總督として知られて居つた。故に福建を研究するものには先づ閩と云ふ語からして入るのが順序であらう。閩と云ふ語の見えたのは周禮が初である。周禮の年代に就ては大分疑點もあるが、私は假に周の中世頃のものと見て居る。勿論後世の附益などもあらうが、可なり古いものと思ふ。この周禮の職方氏の所に八蠻七閩といふ語がある。此の八蠻といふのは、南方の蠻族を斥したのであるが、七閩といふのも同じく南方の蠻族を斥したものである。要するに南方一帯に閩蠻の名稱を有せる種族が居つたのであらう。蓋、閩と蠻とは字は異れども、同じ語原

でなければならぬ。漢書音義に服虔は閩音近蠻といひ、また應劭は音近文といふて居る。閩の字は門に从ひ、虫に从ふて居るが門を以て其音を表はし、虫は蠻族を卑しんだ意味を表はしたものであらう。これは漢人が異民族を稱する時に犬偏を附けたり虫偏を附けたり、麤猶とか蠕蠕とかいふ筆法と同じことである。烏居氏の苗族調査報告に據れば苗族にては人を *hou* 又は *huh* と稱し、彼等自らを稱するにも同じ語を以てすることである。原人の社會には自らを尊びて人とし、他を禽獸視する風習の存するのを見ると、蠻又は閩も同じく人の意味を有する語で、それが遂に種族の名稱になつたのかも知れぬ。たゞ地方によつてその發音の少しく違ふ所から、或は蠻の字を以て稱せられ、或は閩の字を以て稱せられたもので、語原は同一と見做して差支なからう。蠻は古書にも多く見えて、周禮に八蠻の外に秋官に蠻隸といふ職のあるのみならず、詩經には蠢爾荆蠻といひ、孟子には南蠻缺舌之人といふ語も見えて居るが、皆南方の民族の稱たることは明かである。唯閩字は周禮に七閩とある外に閩隸として使用せられた位にて、餘り古書には多く見えて居らぬ。此の蠻といひ閩といふは、元は種族の名稱であつたものが、後にその種族の棲んで居る地方の名稱になつて來たやうに認められる。即ち福建の地方を閩と稱するやうになつたのは、その種族の棲んで居つた所から出たのであらう。

山海經の海内南經の部に

甌居海中、閩在海中、其西北有山、曰閩中山、在海中、

とある。山海經は極めて怪誕不稽のことを書いた書物であるけれども、その中に事實として見らるべきものが多少入つて居る。この甌居海中、閩在海中といふ語は即ち事實として見るべきものであらう。山海經の出來た時代は明確でないが、少なくとも戰國時代から前漢の初期の間位のものと思ふ。故にその中には古來の思想の傳はつたものが少なくない。今この甌居海中、閩在海中の語を解剖すれば左の思想が含まれて居る。(一)甌と閩とが相接した所にあるといふこと。(二)この兩地が同じく海中にあるといふこと。(三)その西北の方に山が在る、即ち一帶の山脈があるといふこと——を認められる。けれどもこれ文ではそれが果して今の何れの地方であるかを確定することは難しい。史記卷百十四東越列傳に據れば、

閩越王無諸及越東海王搖者其先越王勾踐之後也姓騶氏秦已并天下皆廢爲君長以其地爲閩中郡。

とある。此の閩中郡は秦の三十六郡の中には數へられないが、舊來はこれを福建の地方として居る。それが果して當れるか否か、この前掲の史記の文章だけでは正確に斷案を下す譯にはゆかぬ。けれども同じ東越列傳に、

漢五年復立無諸爲閩越王、王閩中、故地都東冶。(中)孝惠三年(中)立搖爲東海王、都東甌。

とあるを見れば、此の閩中の地方に東冶と稱する所があつて、又その近邊に東甌と稱する所があつたことが知られるのである。これを山海經と對照して考ふる時には幾分かその地

位を知る手懸りを得るであらう。今その地位を定めるのには先づ東甌とは如何なる地方を指すか、東冶とは如何なる場所に當るかを確定する必要がある。東甌は少なくとも沿海の地方であることだけは信じられる。それは(一)山海經に甌在海中とある。(二)史記に立搖爲東海王都東甌とある。(三)史記に據ると閩越が東甌を撃つた時に漢は會稽から兵を發して浮海救東甌とある。これ等によれば東甌はどうしても沿海の地方少なくとも近海の地方であらねばならぬと思ふ。東冶及び閩越の地位も矢張海に近い地方であることが窺はれる。(一)山海經に閩在海中とあり、(二)史記に據れば閩越王の弟餘善の語として戰不勝即亡入海とある。(三)三國志魏志十三卷王朗傳に據れば、王朗の會稽の大守であつた時に孫策と戰つて敗績し浮海至東冶とある。これ等の記録に據つて考ふれば閩と東冶とがどうしても沿海の地方であることは疑がない。けれどもその沿海の地方が果して今の何處の地方であるかは更に進んで考察をしなければならぬ。

今この考察をなすに先ち、少しく冶と東冶との區別を辯じて置く必要がある。史記の東越列傳に據れば閩越の都は東冶となつて居るが、漢書の方には唯冶となつて居る。而して同じく漢書の地理志には會稽郡二十六縣の中に冶縣が擧げられて居る。それで古來冶縣を東冶と同一と看做す説が多い。けれども史記に閩越の都を東冶としてあるのに、漢書には單に冶としてある。會稽郡の冶縣と閩越の東冶とを混同したのは寧ろ漢書の誤である。會稽郡の冶縣は閩越の東冶ではなく、且同浦縣の附近でなければならぬと思ふ。續漢書の

郡國志に據れば治縣は光武帝の時に章安と改名せられた、而して隋書の地理志に據れば臨海郡の中に臨海縣と章安縣とが置かれてある。この臨海縣は三國の吳の時に章安縣を分つて置いたものである。唐の元和郡縣志に據れば臨海縣はもと漢の同浦縣の地であるといふのみならず、按治今台州章安故縣といふて居る。即ち漢の治縣を浙江の台州府の方面と見る説である。この説を正しいものとすれば治縣は閩越の都であつた東冶とは全く別であると同時に、東冶の地位は他に求めなければならぬ。而して東冶の地位を定むるのには、先づ東甌の位地を決定しなければならぬ。

東甌の位地は左の記事によつて略推定することが出来ると思ふ。(一)續漢書の郡國志に據れば、永寧永和三年、以章安縣東甌鄉爲縣とある。これ即ち順帝の時に(一三八年)章安縣の東甌鄉を永寧縣としたことを證すべきである。(二)史記の東越列傳の東甌の所の集解に晋の徐廣の説を引いて今の永寧であると言ふて居る。(三)山海經の郭璞の註に今臨海永寧縣即東甌とある。(四)史記の索隱には姚氏の説を引いて甌水即ち永嘉江の邊りに東甌王の都城があつたといふて居る。(五)元和郡縣志には永嘉縣即漢同浦縣之東甌鄉とある。この永寧といふのは永嘉縣のことであつて今の浙江省温州府に屬して居る。杜氏通典には東甌に注して今永嘉郡といふて居る。以上の諸證を基として東甌は今の永嘉江の流域即ち温州府永嘉縣に屬する地方であると斷定して差支なからう。他に東甌を福建省の建安地方に置いた説もあるけれども、それは採ることが出来ない。東甌の位地が此の斷定の通りで

あるとすれば東冶即ち閩越の都の所在も畧推斷することが出来ると思ふ。

東冶即ち閩越の位地につきては、(一)山海經の郭璞の註に閩越即西甌今建安郡也とある。

此の建安といふのは今の福建省の建寧府の地方で、閩江の流域に位して居る。(二)三國志吳志十五賀齊傳に王朗奔東冶侯官長商升爲朗起兵とある。これによれば東冶は侯官縣の附近に在ることが想像される。或は侯官縣の治所は即ち東冶であつたものと思はれる。而してこの侯官縣は今の福州府に當るのである。(三)三國志魏志十三王朗傳に王朗が孫策に破られ、海に浮んで東冶に至つたことを叙し、その注に獻帝春秋を引いて孫策率軍如閩越討王朗、朗浮海欲走交州とある。これによれば東冶から海に浮びて南下すれば交州に達するところが出来たものと思はれる。故に東冶を今の福州方面としても何等の矛盾を生じない。以上の諸證を基として閩越を今の閩江の流域即ち福州府より建寧府の方面へかけて國を成したものと斷定する。

かくの如く東甌は永嘉江の流域、閩越は閩江の流域、即ち浙江省の東南部と福建省の北部とに國を成して居つたものであるとすれば、此の地方の西北は連山重嶺相連り、仙霞嶺の山脈が浙江省を兩分し、又福建、江西の兩省を劃斷して居る。従つて山海經の中に甌と閩との西北有山といふことが事實として信ぜられる。のみならず山海經の中に甌在海中、閩在海中といひ、また一曰閩中山在海中といふことは最も味ふべき言葉であると考へる。蓋太古の時代、少くとも秦漢より以前に於ては恐らくは陸上より此の地方への交通は殆これなくして、

寧ろ海上からの交通が主になつて居つたものであらう。果して然らば之を大陸と離れた所の海中に在る地方と想像したことも無理からぬことと思ふ。現に西暦千六百年及び千六百三十年に和蘭のアムステルダムより出版せられた亞細亞の地圖には、朝鮮を大陸と離れた島嶼として居る。半島を島嶼としたり、大陸を半島と考へたりする例は古來少くないとすれば、西暦前幾世紀の昔に於て此の浙江の南部福建の北部所謂甌と閩とが海中に在りと想像せられたことも強ち怪しむに足らぬことである。従つて此の地方が久しく支那の化外の地であつたことも信ぜられる。

然るに秦から漢の時代に掛けて多少この地方へ手をつけることになつた。秦の閩中郡は即ち閩越の地方に置いたのであるが、これは單に郡の名を附けたゞけで、他の郡縣と同じ働きはしなかつた。史記の東越列傳の中に漢の田蚡の言を掲げて越人相攻撃、固其常、又數反覆、不足以煩中國、往救也、自秦時棄弗屬とある。秦の時既に棄て、屬せずとある以上は、秦の閩中郡を置いたのは一時の名義のみで、眞に郡縣の制度を布いたものでないことが分る。従つて此の地方は實際は秦の統治の外に立ち、閩越と東甌とは依然として割據して居つた。その後漢の時に閩越が東甌を攻むるにあたり、漢は會稽郡の兵を發して東甌を救ひ、閩越を撃退して東甌の人民を江淮の間へ移した。閩越はまた南越と争つた。當時南越から援兵を漢に求めたので、漢の武帝は遂に閩越を征伐することになつた。その征伐の道筋は海路と陸路とによつて居る。海路の方は會稽郡から浙江省の沿岸を南下し、閩江の流域へ進んだ

のであらう。陸路より進んだのは今の何處からであるか、甚だ知りにくい、その地名に據りて考ふれば、主として浙江及び江西の方面から進んだやうに考へられる。これが即ち陸上から閩越の方との關係が史上に現はれた初である。漢は閩越を平げた後に、その人民を同く江淮の間へ移した。漢書に東越地遂虚とあるは即ち閩越のとであるが、その人民を移して虚となつたとすれば、漢はなほ此の地方を統治の外に置き、郡國制度の下に置かなかつたのである。且南越を平定した時には九郡を置いたに拘らず、閩越を滅した時には郡を置かなかつたとすれば、會稽郡の冶縣は閩越の都であつた東冶ではない。若し冶縣を東冶として、今の閩江の流域福州の方面とすれば、大勢の上から解釋することが出来なくなる。けれども冶縣を浙江の台州方面とし、閩越の都の在つた東冶とは全く別なものと見れば、此の解釋をなすことが出来る。又漢書地理志に據れば、同浦縣に南部都尉を置いた。此の都尉の職は主として異民族に接觸するやうな所に置かれたのであるから、會稽郡の南方は即ち異民族に接して居つたものと認められる。されば前漢の時代には會稽郡の領域は今の浙江省の南方永嘉江の流域には多少及んで居つたとしても、今の福建の地方には全く及ばぬものと見なければならぬ。然るに福建の地方にも漸く郡縣が置かれるやうになつたのは、後漢の時代から後のことである。即ち吳の孫策の時には既に侯官(今の福州)建安(今の建寧)漢興(今の浦城)南平(今の延平)の諸縣が閩江の流域に置かれたのみならず、東部都尉を臨海縣に置き、南部都尉を建安縣に置いた。三國志吳志十五、賀齊傳に侯官既平、而建安漢興南平復亂、齊進兵建安、立都

尉府とあるは即ちその消息を窺ふべきである。三國分立の時になつて吳の永安三年(二六〇)年に建安縣を郡となし、後漢以來の諸縣の外に新に將樂、昭武、東平、建平の四縣を置いて、之に屬せしめた。此外に建安の典船校尉や溫麻船屯などを置いた。即ち福建の方面が段々開けて來たことが分る。晋の時代になり、武帝の太康三年(二八二年)に建安郡の南方に晋安郡を置いた、而して建安典船校尉を原豐縣となし、溫麻船屯を溫麻縣となした。全體溫麻と云ふ語は漢語としては解けぬ、恐らくはその地方の土語を寫したものであらう。會稽郡の縣名の中にも漢語で解釋することの出來ないものが大分ある、これ等はやはり地方の土語を寫したものであらう。すべて漢語で解釋の出來ぬ縣名の多い所は、比較的新しく併合せられた地方と想像せられる。當時建安郡には七縣を置き、晋安郡には八縣を置いたが、南朝の宋の時になると、建安郡は依然として七縣であるに拘はらず、晋安郡の方は五縣に減じた。その減じた理由は如何なる事情によつたか分らぬ。且江州を置いて今の福建と江西との地方を一州とし、十郡を統轄せしめた、その十郡の中に建安、晋安の二郡が加つて居る。この統轄は地理上よりみれば不自然であるから、永くは續かなかつた。晋安郡は陳の時に南安郡と改められたが、隋の時に南安郡は廢せられて建安郡に併せられた。是は當時郡縣の併合をした結果であるが、福建地方は建安の一郡と、その所屬の閩建安、南安、龍溪の四縣のみとなつた。然るに唐の元和郡縣志によれば、福建の地方を福州(九)建州(五)泉州(四)漳州(三)汀州(三)の五州に分ち、二十四縣がこれに分屬した。隋の時に郡縣の數を甚しく減

少しした理由は分らぬが、唐の時に急に増加したのは福建の地方が大に發展し來つたことを證すべきである。

前漢の時代に於いて、福建の地方は殆ど化外の地と同じく、郡縣の制度を施行せられなかつたことは前に述べた通りであるが、更に他の方面からも此の地方が前漢の時代に餘り知られなかつたことを證明することが出来る。漢の水經には今の廣東、廣西、貴州方面の水道は割合に詳に書いてあるが、福建地方の水道に就ては一言も及んで居ない。然らば水經の出來た時に福建の地方は猶中原の方へ委しく知られて居らなかつたことを證すべく、又其の地方の開發せられなかつたとも想像せられる。後漢の末に及び閩江の流域は漸く開けて來たが、その南方の方面と西方の方面とは依然として猶郡縣は置かれなかつた。然るにそれが段々開けて、多くの郡縣が置かれるやうになつたのは如何なる事情に基くであらうか、是は三國の時吳が南方に國を建てたとに最も關係があると思ふ。當時吳は建康即ち今の南京を都として江南に割據し、魏蜀と相争うたのであるが、各其の勢力を發展する爲に版圖の擴張を努めた形跡が見える。故に吳の時代から南方の經畧——福建方面の經畧をしたのである。それから五胡の亂に漢人の南方に遷移した結果として楊子江の流域が俄に發展した。それまでは黄河の流域が支那文化の中心で、楊子江の流域は餘り開けて居なかつた。然るに異民族に壓迫せられて漢民族が南遷したので、楊子江流域にも漢民族の文化が普及せられ、その餘波として福建地方にまで開發せられたものと見るのが當然であらう。

今此の福建地方に置かれた歴代の郡縣の數を比較して見ると、其の大勢が知られる。後漢の末には五縣のみであつたが、吳の時には一郡九縣が置かれた、それから晋の時には二郡十五縣になり、宋の時には矢張二郡十三縣になつて居る。所が隋になると一郡四縣に減つたが、唐の時には五州二十四縣になつて居る。是は唐の時に至つて福建が俄に發展し來つたことを窺はしめる。清朝の乾隆時代になると九府二州五十八縣が置かれて居る。これ等の事實で福建の地方が時代を逐うて開發せられたさまを知り得ると思ふ。又人口の點は甚だ不精確であるが、唯古來の記録に書いてある所を比較すれば、不精確の程度に於いてその差違が畧分る。今姑く比較の爲に會稽郡に就いて見るに、宋書州郡志に據ればその戶數が五萬二千二百二十八戸になつて居る、唐の時の越州は宋の會稽郡と稍同じ區域の地方であるが、開元の戶數は十萬七千六百四十五戸となつて居る。宋の時に比すれば殆倍數になつて居るが、これが正當の増加率であらう。所が福建の方面を見ると、其の増加率は著しく昇つて居る、宋書州郡志に據れば建安、晉安二郡の戶數が合して五千八百八十四戸に過ぎない。これは餘り尠な過ぎると思ふが、隋の時には一萬四千二十戸になつて居る、それが唐の開元の年間になると十萬五千九百二十二戸に増加して居る、宋の時に比すれば殆ど二十倍に近い。大抵支那の人口は一戸五六人位であるとすれば、開元時代の人口は約五六十萬人と見るのが適當であらう。此の増加率の著しきは從來福建の地方の開發が割合に緩慢であつたのを唐の時代になつて急に開發せられた爲めと思ふ。

廣東の地方が前漢の時からして割合に開發せられたに拘はらず、福建の開發が後れたのは如何なる原因であらうか。之は蓋し天然の地形に最も關係がある。江南の地方から廣東の地方へ通ずる交通路は江西の南昌府の方から往くと、贛江を溯つて南安縣まで船で行き、これより船をすて、翌日直ぐ大庾嶺を越える。此の大庾嶺は僅に三百米突位である、大庾嶺を越え始興へ著すれば、潁水を下つて韶州へ達し、更に同じ水路によつて廣州へ達することが出来る。それであるから古來廣東との交通路は極めて容易であつた。彼の菩提達磨は廣州から此の道を経て建康に出たやうに傳へられて居るが、明の時の利瑪竇もやはり此の道を経て南昌へ出て南京へ來つた故にその碑記には跋、庾嶺駐豫章とある。又湖南の方からも水利を利用して桂陽の境へ達し、更に大庾嶺の山脈を越せば韶州へ出て、やはり河船を利用して廣州へ達するとが出来る。彼の諸葛孔明が荆州北據漢、西利盡南海と言つたのは廣東方面と湖南湖北の地方との交通が當時已に存したとの證據である。かく廣東と江西湖南方面との交通は割合に容易であつて、古くより往來があつたのであるが、福建と浙江江西との關係は頗るこれに異なつて居つた。福建浙江の間には仙霞嶺の山脈があつて、楓嶺を過ぎて閩江の上流へ出るのであるが、陸軍の實測圖に據れば、楓嶺は五百米突位の高さになつて居る。江西から福建へ赴くには杉關を過ぎて、やはり閩江の上流へ出るのであるが、此杉關の高さは未だ明でない。それから更に福建の南方の地にて江西に接して居る處には高山峻嶺が横はつて居る、アンドロートの地圖に據ると高さ二千米突位の處が

ある。それ故に福建の南方と江西との交通は頗る困難であるので、多く杉關の交通路が利用せられて居る。要するに福建の西面及び西北面は連山重嶂、山又山になつて居る、故に山海經に甌と閩との西北有山といふのが事實であるのみならず、閩在海中と想像せられたのも決して偶然でない。要するに此の天然の事情が福建の開発を後れしめた大なる原因であると思ふ。

福建の未だ開發せられない時に方つて、その對岸であるけれども、眞に海中に隔絶して居る臺灣の一島が、支那人の知識の中に有るが如く、無きが如く、極めて朦朧になつて居つたのは決して怪しむに足らぬ。その後福建が漸く開發せらるゝに及んで、臺灣も亦次第に知られることになつたのは當然の順序である。彼の瓊州島が早く知られたのは、廣東が早く知られた爲めであつて、臺灣が割合に晚く知られた所以は、福建の開け方が晚かつたからである。福建の地方は唐の時にも猶蠻族の棲息して居つたことは、當時新に置かれた十縣の中には山洞蠻族の居る所を開いた所もあるもので分る。唐の時に猶異民族が多く居つた位であるから、秦漢の時代には殆ど化外の地で、全く内地の郡縣とは實際非常に違つて居つたことが想像せられる。その時代に於ける臺灣は果して支那の本土に知られて居つたらうか、若し知られて居つたとすれば如何なる名稱で知られたであらうか、これより臺灣のことに就いて述べてみやう。

漢書の地理志に據れば

唐以前の福建及び臺灣に就いて

會稽海外有東鯤人分爲二十餘國以歲時來獻見云、

とある。後漢書の東夷傳にもこれと同じやうな記事があつて、唯以歲時來獻見といふ語を略してあるだけである。後漢書は前漢書の記事を轉載したに過ぎないことが分る。この漢書以外には東鯤人に關する特別の記事を見出さぬ故にその考證をなすべき材料は甚乏しいけれども、漢書の記事をその地理志に樂浪海中有倭人といふのと同じ價値あるものとするならば、必しも架空のものとするとは出来ない。然らば東鯤人は果して今の何處を指したのであらうか、若し樂浪海中の倭人以外に於て會稽海中に分れて二十餘國となつて居る土地がありとしたならば、今日の琉球を指したものでなければ、或は臺灣を言ふたのではなからうかと想はれる。けれどもこの地理志だけの記事で他に傍證となるべきものがないから、東鯤人の果して何處であるかに就いては明確なる斷案を下すことは出来ない。たゞ會稽の海中に漢代に支那の本土と交通をした國があつたといふことを認むるだけに過ぎない。次に抱朴子の金丹篇に據れば、

海中大島嶼、若會稽之東、翁洲、亶洲、綜嶼洲、及徐州之羊莖洲、泰光洲、鬱洲、皆其次也、

とある。この東翁洲といふのは何處であらうか。これも傍證となるべき材料が乏しいからその位置を確定することは難い。綜嶼洲は太平御覽の七百八十二卷四夷部東夷の處に外國記を引いて

周詳泛海落綜嶼、上多紆、有三千餘家、云是徐福童男之後、風俗似吳人、

とある。是が今の何處であるかは矢張確定し難い。松下見林は異稱日本傳に於て今按綜嶼不知指何地疑今八丈島嶼といふて居るが何等根據のない臆説に過ぎぬ。唯亶洲は夷洲と共に三國時代から吳の國と關係があつて、歴史の上にも見えて居る。吳の黃龍二年即ち西曆二三〇年に亶洲夷洲へ兵を出さんとしたことがある。三國志吳志二孫權傳に

遣將軍衛溫諸葛直將甲士萬人浮海求夷洲及亶洲。亶洲在海中。長老傳言秦始皇帝遣方士徐福將童男童女數千人入海求蓬萊及仙藥。止此洲不還。世相承有數萬家。其土人民時有至。會稽貨布。會稽東縣人海行。亦有遭風流移至亶洲者。所在絕遠。卒不可得至。但得夷洲數千人。

選

とあるが、後漢書の東夷傳にはこの記事を節略した上に徐福移住の話亶洲と夷洲との兩方へかけて會稽東縣人といふのを會稽東冶縣人と改めてある。後漢から三國へかけて、東冶の地方には侯官縣が置かれたけれども、東冶縣の名稱はない、故に三國志吳志の會稽東縣人といふ方を正しいとしなければならぬ。

さてこの夷洲亶洲が果して今の何處であるかはむづかしい問題であるが、古來これを日本にあてた説がある。それは徐福の移住説から起つたものに過ぎない。三國志には徐福の移住を亶洲に限つて居るが、後漢書には夷洲と亶洲とへ移住した如く述べて居る。然るにこれを日本へ移住したものとしたのは五代の時の義楚六帖の説である。即ち同書廿一卷に

日本國亦名倭國、在東海中、秦時徐福將五百童男五百童女止此國也。
とある。その後歐陽修の日本刀歌に

(略前) 傳聞其國居大島、土壤沃饒、風俗好其先、徐福詐秦民、採藥淹留、卽童老(略下)

といふ句がある。かくの如くして徐福の移住は日本と結び附くことになつたが、更に一轉して夷洲、亶洲を日本と見做すに至つた。明の太祖の御製文集十六卷禮部問日本國王に

若夫叛服不常、構隙中國、則必受兵。如吳大帝、晉慕容廆、元世祖皆遣兵往伐、俘獲男女以歸、千數百年間、往事可鑒、王其審之。

とあるは、吳の孫權の征した夷洲を以て日本となした初めである。陳仁錫の皇明世法錄七十六卷日本考には

先時秦遣徐福將童男童女數千、入海求蓬萊仙人、不得、懼誅、止夷、亶二洲、稱秦王國號倭、とあるが、遂に夷洲、亶洲を日本として疑はざるやうになつた。この説は獨支那に於て認められたのみならず、日本の學者にも信ぜられたものと見えて、本朝通鑑卷一神后紀に

庚戌三十年、吳王孫權使其將軍衛溫、諸葛直等率甲士萬人浮海侵我西鄙、不克、士卒疾疫、死者十八九、經歲而去、溫等以無功被誅、

とある。これは全く明の太祖の御製文集や皇明世法錄等の説に基いたものであらうが、遂に虚から出てた實となつて、日本の歴史にも明に記されるやうになつたのである。今その虚實を辨せんとせば、先づ夷洲、亶洲の位地を明にするのが必要である。夷洲、亶洲の位地が

明にならば、それが日本であるか、ないかは自然に明になると思ふ。

亶洲と夷洲とが同じ所でないことは、吳志の記事に據つても窺ふことが出来る。即ち亶洲は絶遠にあるから至ることを得ず、遂に夷洲の數千人を虜にして歸つたとあるのを見れば、此の二洲は相離れて居つて亶洲は夷洲より遠隔の地にあつたことが分る。然らば亶洲は今何處であらうが、史記正義に括地志を引いて亶洲在東海中とある。これは頗漠然たる記し方で、その位地を定むる材料にはならないが、私は左の理由によつて今の瓊州島と斷定するのである。(一)三國志吳志孫權傳には夷洲、亶洲を討つたことになつて居るに拘らず、他の傳には夷洲、珠崖を征せんとしたことになつて居る。即ち同書吳志十三卷陸遜傳に權欲遣偏師取夷洲及珠崖皆以諮遜とあり、遜の上疏を載せて

臣愚以爲四海未定、當須民力以濟時務、今兵興歷年、見衆損滅、陛下憂勞聖慮、忘寢與食、將遠規夷州、以定大事、臣反覆思惟、未見其利、萬里襲取、風波難測、民易水土、必致疾疫、今驅見衆、涉不毛、欲益更損、欲利反害、又珠崖絕險、民猶禽獸、得其民、不足濟事、無其衆、不足虧衆、今江東見衆、自足圖事、但當畜力而後動耳、云々、

とある。又同書吳志十五卷全琮傳には權將圍珠崖及夷洲、皆先問琮とあり、琮の言を引いて以聖朝之威、何向而不克、然珠方異域、隔絕障海、水土氣毒、自古有之、兵入民出、必生疾病、轉相汚染、往者懼不能反、所獲何可多致、猥虧江岸之兵、以冀萬一之利、愚臣猶所不安、

とある。これによれば、夷洲、珠崖の征伐と、亶洲、夷洲の征伐とは同一の事實であると認めな

ければならぬ。故に孫權傳にある亶洲夷洲と、全琮傳や陸遜傳にある夷洲珠崖とは同じものであると思ふ。(二)今の瓊州島には漢の時に珠崖儋耳の二郡を置いたが、昭帝の時に儋耳郡を廢して珠崖郡のみとなした。後に或は崖州となつたこともある。この儋耳の儋は亶洲の亶と音の相通するのみならず、唐の時に此の地方に儋洲を置き、明や清にても亦儋洲を置いた。然らば三國時代に珠崖の地方を亶洲と稱したことも怪しむに足らぬ。故に私は亶洲を今の瓊州島と斷定する。けれども若し吳の國の勢力が西暦二百三十年以前に瓊州島に及んで居らば、此の説が成立たぬことになる。然るに吳が珠崖郡を立てたのは赤烏五年即ち西暦三百四十二年のことと孫權が亶洲即ち珠崖を討たんとした時より十二年許後のことである、故にこれを瓊州島と斷定しても決して衝突を來すことはない。禹貢錐指の地圖には亶洲を今の呂宋の所に當てゝあるが、是は何の理由に據つたか、従ふことは出來ぬ。亶洲が既に瓊州島であると定まらば、更に進んで夷洲は何處であるかを決定しなければならぬ。

後漢書の東夷傳の註に沈瑩の臨海水土志を引いて

夷洲在臨海東南去郡二千里、土地無霜、雪草木不死、四面是山谿、人皆髡髮、穿耳、女人不穿耳、土地饒沃、既生五穀、又多魚肉、有大尾短如麕尾狀、此夷舅姑子婦臥息共一大牀、略不相避、地有銅鐵、唯以鹿角爲矛、以戰鬪、靡礪青石以作弓矢、取生魚肉雜貯大瓦器、以鹽鹵之、歷月餘者、啖食之、以爲上肴也。

とある。この臨海は郡の名で今の浙江省台州府臨海縣に當る。太平御覽七八〇卷にも臨海水志を引きて夷洲のことを記して居るが、前半の記事は後漢書注に引く所と大體似て居るけれども猶多少の異なる所があり、又後半の記事は後漢書注に全く見えないから、今茲にその全文を掲げやう。即ち

夷洲在臨海東南去郡二千里土地無雪霜草木不死四面是山衆山夷所居山頂有越王射的
正白乃是石也此夷各號爲王分畫土地人民各自別異人皆髡頭穿耳女人不穿耳作室居種
荊爲蕃鄣土地饒沃既生五穀又多魚肉舅姑子婦男女臥息共一大牀交會之時各不相避能
作細布亦作斑文布刻畫其內有文章以爲飾好也其地出銅鐵唯用鹿觔矛以戰鬪耳磨礪青
石以作矢鏃刀斧鑲貫珠鑑飲食不潔取生魚肉雜貯大器中以滿之歷日月乃啖食之以爲上
餼呼民人爲彌麟知有所召取大空材材十餘丈以着中庭又以大杵旁舂之聞四五里如鼓民
人聞之皆往馳赴會飲食皆踞相對鑿牀作器如稀槽狀以魚肉腥臊安中十五五共食之以
粟爲酒木槽貯之用大竹筒長七寸許飲之歌似犬嗥以相娛樂得入頭斫去腦駭其面肉留置
骨取犬毛染之以作髭眉髮編貝齒以作口自臨戰鬪時用之如假面狀此是夷王所服戰得頭
目首還於中庭建一大材高十餘丈以所得頭差次挂之歷年不下彰示其功又甲家有女乙家
有男仍委父母往就之居與作夫妻同牢而食女已嫁皆缺去前上一齒

とある。この書の著者沈瑩の事蹟は詳にするを得ないが、六朝の人と見えて隋書經籍志には臨海水志をあげてある。太平御覽の引用書目には臨海水志と臨海水物志とを

擧げて居るが恐らくは同一の書であらう。兎に角宋の初めに臨海水土志の現存して居つたことは疑ない。

さて是等の記事を基礎として考察する時には夷洲は臺灣でなければならぬと思ふ。(一)はその方角及び距離の點である。臨海の東南といふのは今の浙江省の台州方面から稱するのであるから方角からいへば正しく臺灣に當つて居る。但その二千里といふのは甚遠きに失して居るけれども後世の支那の地圖を見るに今の福州の地方と臺灣との距離を千三百里と書いたものさへある。水土志の里數二千里も固より大略のことをいふたに過ぎないのであるから、今の臺灣に當てゝ差支ない。(二)は氣候の點である。土地に霜雪なく草木死せずといふ記事を眞としたならば、夷洲を日本の九州邊に當つるよりは臺灣とする方が寧ろ事實に合ふことになる。(三)は地形地味物産の點である。四面は皆山溪で土地が饒沃で五穀も生じ、又大竹を産するやうなことは臺灣に適合する。(四)は風俗の點である。或は髻髮耳を穿つとか鹿角の矛を造つて戰鬪をするとか、或は青石を磨して、矢鏃を造るとか、或は人間の頭骨を集めて飾にしたり、或は高き木に戰勝で得た人頭を懸けて置くやうなどは、後の臺灣生蕃の風俗に似て居る。今の生蕃は古代には臺灣の西海岸の方にも棲息したのであるから、これ等の記事は夷洲を今の臺灣であると推定するのに有力な材料になる。この臨海水土志の記事と今の臺灣生蕃の風俗とを對比して、猶一層精細に研究したならば、更にその類似を發見する所があらうと思ふ。禹貢錐指の地圖には臺灣の所へ夷洲の名を

あてゝある。これは何の理由に基いたか分らないが兎に角胡渭の所見は私の考と一致するものである。

要するに吳の時には既に福建の地方を經營したのであるから、その對岸の臺灣にまで勢力を及ぼすは決して偶然のことでない。所が此の夷洲即ち臺灣と見られる所の地は東晉から南北朝の時代へかけては史上に現はれず、單に臨海水土志に見えて居る位に過ぎない。何故に東晉南北朝時代に此の地が史上に現はれぬのであらうか、これは政治的關係を生じなかつた爲めであらう。蓋南北對峙の時代は南朝の目的は中原の恢復にあつた。時に交趾の地方を經營したことも見えて居るけれども、これは後顧の憂を斷つ爲に過ぎない。故に臺灣の地方までを經營するには及ばなかつたのであらう。然るに隋が南北を統一するに及び、その勢力は支那本土の周圍に發展することになり、従つて再び臺灣の方面へも手を着けることになつた。その流求經畧は即ちこれである。

隋書に據れば大業の三年即ち西曆六百七年に羽騎尉の朱寬を遣して海中に入つて異俗を訪求せしめ、流求國に至つて一人を俘虜にして歸つた。翌年煬帝は再び朱寬をして慰撫せしめたが従はぬので武賁郎將の陳稜を遣して兵を率ゐて義安から出征せしめ、海に浮んで流求に至り、男女數千人を俘虜にして歸つたことが見えて居る。此の流求は疑もなく臺灣である。それは隋書だけの記事でも證明される。(一)は位置、即ち居海島之中、甯建安郡東、水行五日而至とあるのみならず、海師何蠻の言を擧げて每春秋二時天清風靜、東望依稀似有烟

霧之氣とあるは、その方角と距離とを斷定するに足るべきものである。(二)は地勢及び地味、これは即ち土多山洞といひ、厩田良沃、先以火燒而引水灌之といふによつて推測される。(三)は物産、稻梁黍麻豆があり、樟松檉楠杉梓竹藤等がある。(四)は風俗、王所居壁下、多聚髑髏、以爲佳、門戶上必安獸頭骨角と見えて居る。此の隋書の琉求の記事は臨海水土志の記事と相俟つて發明することが出來やうと思ふ。

義安といふ處は今の廣東省潮州府に屬して居る。隋書に據れば、これより船を乗出すと先づ初めに高華嶼に至る、それから更に東行すると二日許にして鼈巖嶼に達し、又一日にして琉求に至ることになつて居る。高華嶼は今の何島であるか明でないが、潮州附近の島嶼であらう。鼈巖嶼は澎湖島でなからうか、若しこれを澎湖島とすれば、一日にして琉求即ち臺灣へ達することは當然の順序であらう。隋書に朱寬が琉求へ行つた時に布甲を得て歸つたが、當時の日本の使者は之を見て邪久人の用ゆる所なりといつたとある。然らば當時邪久島から臺灣の方へかけて交通があつて臺灣で用ゐて居つた布甲が矢張邪久の方にも傳はつて居つたものと思ふ。

琉球が臺灣であることは後世に至つて殆疑がないことで、元の汪大淵の島夷志略の琉求の記事は明に臺灣であることが證明されるのみならず、明代の西人の地圖にも臺灣を琉求となして居る。故に隋の琉球も亦均く臺灣であることは論ずるまでもない。而してその琉求は三國の夷洲であることも亦已に述べた通りである。前漢の時福建の地方は未だ開

發せられなかつたから、臺灣も全く知られなかつた。然るに後漢の末より三國へかけて福建が漸く開發せらるゝことになり、臺灣も漸く知らるゝに至つた。唐以後になるとその關係は漸く深く、殊に明代になつて一層深くなり、彼の鄭成功の清朝に對抗した時には如何に臺灣と福建との關係が密接であつたか、茲にあらためて言ふまでもない。若し過去に於て臺灣と福建とが互に關係あつたとしたならば、現在若くは將來に於て國家の經論に志す者は矢張その關係について注意を拂ふべきことであらう。これがこの演題を掲げて卑見を述べた所以である。(完)

葡萄牙人澳門占據に至るまでの諸問題

藤 田 豊 八

- 一 問題の範圍
- 二 Fernão Peres de Andrade 來航の支那記録。加比丹末と火者亞三
- 三 Martin Afonso de Mello Coutinho 來航の支那記録
- 四 Tamão (Tamou) は何處か